

■特集：シンポジウム「奄美の地域づくりとヤジの再生」 －リュウキュウアユフォーラム2007－

基調講演：「リュウキュウアユの魅力」

四宮明彦（鹿児島大学水産学部）

「地域づくりと環境再生」

島谷幸宏（九州大学大学院工学研究科）

日時：平成19年4月21日（土） 場所：奄美観光ホテル

地元ではヤジと呼ぶリュウキュウアユは、今自然環境下では、世界中で奄美にしか見られません。以前は奄美の川にも多くのヤジがいて、捕ったり、食べたりとヤジに係わる文化がありました。

アユを大きくする上で水田が非常に大事だと。山と畑、田んぼ、川、海とつながっているわけで、まず休耕田を復元して頂きたい。そのときに小さな集落だけではもう無理です。都市部の人のお力をお借りする。先生方が一番良いと思います。先生方の力が非常に大きいかと思っています。

世界自然遺産をにらみながらリュウキュウアユというものを地道に回復していく、最終的に食べることまでいこうという、その方向性については共有できたのではない

シンポジウム会場



基調講演：「リュウキュウアユの魅力」

四宮明彦（鹿児島大学水産学部教授）

かなと思います。

四宮：今日はたくさんの方に来て頂きまして、ヤジのことについて皆さんと一緒に考えて何とかこれをこの地域の資源として残し、利用することについてお話したいと思っています。

奄美大島はかなり大きな島で、日本の島の中でも大きな島です。亜熱帯の気候の中にあって、島の南と北では地形や気候の様子が違います。北の方では飛行場のあるような平坦なところが多いのですが、中南部になりますと、山が多くて大量の雨も降ります。雨が降るということは大きな川ができるということになります。奄美の川には非常に多様な淡水魚が生きています。その代表がリュウキュウアユです。

ご存じのようにアユは日本全体に分布しており、北海道の南部から、本州九州屋久島までいます。大陸側では、朝鮮半島や中国はベトナム近くの海南島の近くまで点的に分布しています。

【自然個体群は沖縄で消滅、今や奄美だけ】

いっぽうリュウキュウアユは沖縄島と奄美大島にだけいます。いわゆる琉球列島と

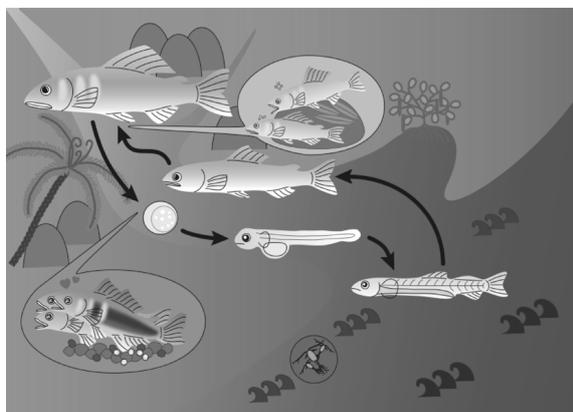
呼ばれる島に生まれたという意味でリュウキュウアユという名が付いたのです。残念ながらアマミアユではなかったのです。でも今や自然の個体群は沖縄では消滅しました。世界中で奄美にしかいなくなりました。

これらがどれくらい本土のアユと遺伝的な違いがあるのかを荒い尺度で示したものです。日本列島と大陸のアユとの違いが1ほどとしますと、琵琶湖のアユは10倍も違います。ここは数十万年前にできた構造的な湖で、ここに入り込んだアユは海と行き来ができなくなって遺伝的にも異なっています。他のアユとは全く交流のないアユです。ところが大陸と日本列島のアユはほとんど同じなのです。ちょっと不思議な気がします。それはアユという魚がどの川にもいて、卵からかえったアユの子供は岸沿いに海を伝わって隣の川にも行く。こうして隣同士で全部つながってしまうのです。

さてリュウキュウアユはどう違うか、ご覧下さい。約百倍も違っている。大陸や日本列島のアユとなぜそれほど大きな遺伝的な違いができてしまったかということ、それは成立の歴史に理由があります。

昔（一千万年も前ですが）大陸と島々が地続きだった時代が何度もありました。アユの元になった祖先種が一様に分布してい

アユの一生



たのでしょう。そのうち一部は切り離されて、トカラ海峡（一千弱）、沖縄トラフ（一千超）という深い海で切り離されて、取り残されたのです。ここにいた生き物はここの中だけで遺伝子の交換をせざるを得なくなり、だんだん性格の違ったものになり、やがて別種になってしまったのです。このようなやり方で琉球弧固有の生き物ができたのです。リュウキュウアユもその一つです。百万年ともされる歴史の中で培われてきたのがリュウキュウアユです。同様なことがアマミノクロウサギやルリカケスなどの固有種で知られます。それらがこれから世界遺産を目指す奄美にとって重要な資源になっているわけです。

[アユは海と川を行き来する魚]

アユはご存じのように海と川を行き来する魚です。子供の時代に川へのぼった魚はどんどん成長して大きくなって夏を謳歌します。大きな体でなわばりを作って餌を取って、秋になると下って行って川の河口近くまで行って卵を産む。産んだ卵は約2週間で孵化します。孵化した仔魚はその晩のうちに川を流れ下って海に出ます。産卵した親はたった一年で死んでしまうので年魚とも呼ばれます。子供は海で育つのですが、そんなに遠く外洋まで行くわけではありません。沿岸2キロ以内の内湾で過ごします。その理由は真水と海水の混じった汽水が好きなのです。その周りにはマングローブなどの林がありますが、ここから栄養分が出てきますのでプランクトンがたくさんいて餌が豊富。他の補食魚からも逃げられる。ここで育ってまた川を上っていく。それを繰り返します。

遺伝的な話を続けると、奄美大島の中でも太平洋側の住用湾と東シナ海の焼内湾とどちらにも川があってリュウキュウアユが住んでいますが、ふたつの集団は遺伝的に

大きな差があります。住用湾のアユは隣り合った川なら行き来できますが、遠く瀬戸内の海を回っては行けないのです。独立した集団ですから、保全するにはどちらの集団も大事にしなければなりません。

さてリュウキュウアユは今まで話してきたように、世界中でここにしかいない、替わりがきかない存在ですから、なんとしても保全する必要があります。かつて沖縄では1970年代の後半に絶滅しました。その後一所懸命探しましたがもういません。今沖縄では奄美の親魚から生産した種苗を北部ダムに放して、一万尾前後が定着しています。

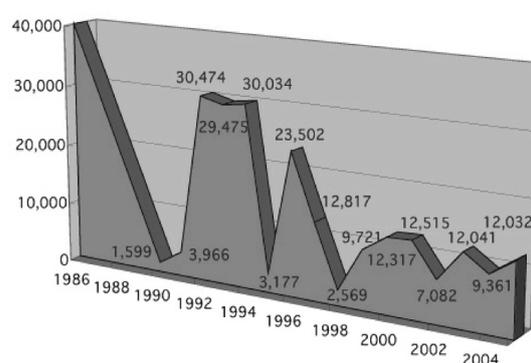
台湾にも本土と同じタイプのものがありました。数十年前にいなくなりました。今台湾に行くとアユはいますが、それは本土のアユを持って行ったものです。比較的簡単に島での絶滅は起こってしまうのです。だから気をつけながら保全し、利用へと持って行きたいものです。

[現在は約1-1.5万尾が生息]

今どれくらいいるのでしょうか。奄美大島では住用湾の住用川、役勝川、川内川の三河川がメインです。それと東シナ海側では宇検村の河内川とこの四つの川で産卵が確実に行われます。ただしそれ以外の川にも、少しずついますが、それはここから流れ出した子供が居着いたものと考えます。というのは毎年行ってみますと、去年まではいたけど、今年はいないよ、というようなことがあります。私たちが調査をやり始めてから15年ほど、1991年からですが、その前に琉球大学の西田先生のグループの調査では、4万尾ほどが奄美大島にいたというデータがあります。

これは2005年までのデータですが、その後もカウントしてみるとだいたい1-1.5万尾程度です。これまで私たちが調べて一

奄美大島における個体数変動



番多かったのは3万尾です。1986年で4万尾、10年、15年前でそれでも10倍いたかどうかです。過去最大では数十万尾いた時代があった可能性はあります。川の規模がそんなに大きくないのでそれくらいのもので

[流域開発で赤土が流入、生息環境が悪化]

減少した原因は、大水害や干ばつはありますが、恒常的に川の流域の周りで土地開発をやっています。農地を造る、家を造る、道路を造る、何かをやると必ず地面を掘り起こします。すると奄美も沖縄もそうですが赤土です。雨が降って赤土土砂が川の中にはいると、粒子が細かくいつまでも濁りがとれません。下流域に溜まって大事な産卵場をだめにします。それ以外にも源流の森林の伐採も困ります。これをやると大雨の時、がけ崩れを起こす元になります。

漁具では、秋から冬にモクズガニを捕るヤナを仕掛ける「アネク漁」にアユも入ってしまいます。これも困ります。

さっき北海道のイトウのことを研究している川口さんと話をしましたら、「北海道のイトウもよく似ている。結局これだという一つの条件ではなく、色んな流域で起きる開発の一つ一つが少しずつ少しずつ首を絞めてくる。それでイトウもいなくなる」と言っておられました。そんなものだろう

と思います。

川の状況が悪くなると体が大きくなれないのです。餌の状況が悪くなる。赤土があれば石を覆いますから食べようにもコケが生えないのです。体が大きくなれないと産む卵の数が増えないのです。魚はサイズで産み出す卵の数が決まります。メスは12 $\frac{1}{2}$ なら卵は10 $\frac{1}{2}$ くらい取れます。20 $\frac{1}{2}$ なら40 $\frac{1}{2}$ くらいの卵が取れます。全然違うのです。繁殖能力に大差ができてしまいます。そんなことで流域での開発が赤土を流し、それが産卵場に行きますと、表面上は良さそうに見えますが、長靴でさぐってみるとこんなに赤土が舞い上がってきます。ここに卵がありますが、泥に埋まるともちろん生きられません。

ここで宇検の河内川と役勝川の生息数を比べてみますと、役勝川が一番良い時15000尾くらいいました。今は半分程度です。ところが河内川では一番良い時10000尾くらいいたのが、最近1000尾とか2000尾くらいしか出ない。回復が悪いのです。どうしてだろう。

[干潟の再生でアユの子供の生息場を確保]

住用湾と焼内湾の環境を見ますと、住用湾は国定公園の素晴らしいマングローブ林があり、干潟がちゃんとあります。いっぽう焼内湾は埋め立てで干潟が無くなりました。流入する川も住用湾は二つありますが、焼内湾は川が一つしかなくて水量が少ない。12月の河口の水温が住用湾は18.7℃。焼内湾は21.3℃。大した差はないように思われるかも知れませんが、アユにとっては違うのです。

リュウキュウアユを実験的に温度を変えて飼ってみますと、高温ではすぐ死んでしまいますが、低温では永く生き延びます。25日経った子供で実験しても21℃ではみんな死んでしまいますが、18℃では永く生き

延びます。ですからアユは子供の時には高温に弱いということです。

奄美では冬でも22℃以上の海水が入ってきて湾内水を温めます。それを冷却するのが川の水と干潟です。潮が引いた干潟は冬の大气で冷やされ、満ち潮に乗ってきた海水を冷却します。埋め立てで干潟がなくなると第一に湾内海水の冷却機能が失われます。第二にマングローブ林からの栄養供給がなくなり餌生物が減る。第三には捕食者からの逃げ場だった浅所を失うこととなります。こんなことからアユの子供には住みにくい環境ができてしまっています。

アユの保全にとって必要なことは色々ありますが、そのいくつかをお話します。

河内川の埋め立て地の前に調整池があります。堤防内の雨水を一時的に溜めて、潮が引いたときに流す装置です。その一部を使って弓型の堤防を造ってその中に砂を溜めます。新しくできた砂浜にはマングローブを植えます。こういう自然改変をやる干潟をかなり再生できると思います。

干潟の広がる役勝川河口



[温暖化対策としてダムに個体群移設]

もう一つは、これからだんだんと地球が温暖化していくと暖かいままの冬が増えてきます。そうすると産卵がうまくいかなくなる可能性が出てきます。その時でも緊急

避難先としてダム湖に個体群を移設しておけばかなり安心です。先のように沖縄ではすでにダム湖にアユを定着させることに成功しています。ダム湖は標高が高く、海水も来ないので暖冬でも水温は低く、アユの産卵には好都合です。奄美でも条件を整えれば可能になると思います。

奄美には砂防ダムがたくさんあるのですが現状では溜まった土砂は川に流れて来ません。川に流入するはずの砂利の供給が止まった状態を改善するためには、スリット式のダムというのがありますから、こういったものに変えて土砂を供給する。それから淵と瀬を再生させる。淵と瀬は川のユニットです。アユは浅い流れる瀬で餌を好み、夜は淵、こちらの言葉でコモリですね、淵で休息する、そういう場所を回復させることが大事です。これを自然再生のプロジェクトでやりたい。

[望まれる養殖技術の確立]

天然アユを守るにはまず、人々にアユや川への関心を持続させることが大事です。従って食べたいという欲求にもこたえることが必要です。そのためには養殖技術を確立することです。本土のアユは完全な技術が確立していますが、リュウキュウアユではまだです。これに本腰を入れて公共の機関が関与して本格的な技術を開発する必要があります。それでできたものは食の要求にこたえますし、地域ブランドともなります。

リュウキュウアユは南のアユですから、本土のアユが持っていないような性質を持っているはずで、その遺伝子資源の魅力もあります。そういったものも、そういった機関が開発の過程で明らかにして利用していくことが可能です。リュウキュウアユを保全しつつ利用する。そのために養殖技術が確立される必要があります。

つぎに流域の至る所で森林の保全や河畔

林の保全とかも大事ですし、今はエコツーリズム、グリーンツーリズムも盛んになってきました。奄美ならではの色んな体験ができます。例えばテナガエビ釣り。内地の人がやったら喜びますよ。川が何しろきれいですからね。それを食べられるんですもの。

[田んぼが持っていた水の循環機能]

流域内にはかつて田んぼがたくさんありました。田んぼは農地から流れてくる土砂をいったん止めて、そして川へゆっくり流してやる機能があったのです。今残念なことに奄美からほとんど水田は消えています。田んぼがアユが棲んでいる川の横に再生できることはまた良い水の環境が戻ることになります。

また地域ブランドとしてのヤジ料理。これは養殖したらできますよね。その他にも田んぼが復元できたらヤジ米もできるかもしれない。黒米も作っておられますが、ヤジ米もどうでしょう。そんなものがだんだんできてくる可能性があります。

この夢にどうやって近づくか。まず5年後。5年後は奄美が世界自然遺産になる、たぶんという私たちの勝手な考えでここにおいてあります。これに向けてさっきの自然再生プロジェクトを何とか実現させます。いったん事業が始まったらそんなに時間はかかりません。そこへもっていくまでは大変ですが、実現できる可能性があります。

養殖アユの技術もやり出せば確立できるはずで、どんどんと地域を元気づける仕掛けを動かしていく。後でパネラーの方がお話をします。地域がにぎわう、元気が出る、人が集まる。地域と共生した暮らしができることを夢見ます。10年後には天然アユの一部を解禁して食べるというのもあっていいですね。最終的にはいつでも食べられる天然アユにしたいものです。

基調講演：「地域づくりと環境再生」
九州大学大学院工学研究科教授 島谷幸宏

島谷：こんにちは。九州大学の島谷と申します。今日は「地域づくりと環境再生」ということで30分くらいお話しさせていただきます。

[21世紀は環境再生の世紀]

皆さんご存じの方も多いと思いますが、21世紀は環境再生の世紀といわれています。今までの環境行政は公害対策型の環境保全でしたが、最近になって色々な環境再生の法律が整備されてきました。私の分野の河川法という法律では、1997年に治水と利水が目的だった川の管理が、それに環境を加えたということです。これは大きな改訂でした。

川はそれまでは治水と利水のために改修をやっていたのですが、環境も管理の目的に加えるということで、治水・利水と環境が全く同じ立場に立ちました。川の河川事業であっても環境だけの事業ができるようになったのが1997年です。その年に同じくアセスメント法と言われる環境影響評価法ができました。これは大規模な工事を行ったときに、環境の影響を評価しないとイケないという法律です。それから2002年に自然再生推進法という画期的な法律ができました。これは小泉さんが総理になったときに作られた法律で、失われた自然を取り戻すための事業をやっていくということなのです。これは環境省と農水省と国交省の三省がやる事業です。

今自然再生は全国各地で行われている、そんな時代になりました。これの特徴は難しい順応的管理と言われておりまして、自然が対象の事業なので最初から全部のことが分かっているわけではないので、やり直しをしながら、やってみて少し悪かったら

計画を変えてというやり直しのきく方法でやろう、というのが一点と、住民の参加を図っていくような事業をしようという、非常に大きなやり方の転換をしたことです。同じく2002年には環境教育推進法ができて、2003年には景観法ができるということで、日本の環境保全とか環境再生の法律がここ10年くらいでやっとそろってきたのがわかります。これまでも全国で色々な取り組みが行われてきたのですが、法的な裏付けが本当にここ数年でできてきたというのがわかります。

[行政も説明型から合意形成住民参加型へ]

市民活動とか行政スタイルも10年くらいで大きく変わってきました。市民運動も行政批判型のものから共働型の市民運動へ、行政も市民も一緒になってやっていくという形に変わってきました。行政も説明型の行政展開から、一緒に色々な事業を成し遂げていくという合意形成住民参加型の行政スタイルへと変わってきました。

ソウルの河川再生工事



最近、最も注目されるアジアの都市再生事業としては、チョンゲチョン川という韓国の川再生プロジェクトがあげられます。ソウルの市内を流れるチョンゲチョン川は地面の下に埋められていて、その上を高架道路が走っていました。しかし、そんな状況の川では街に潤いがないと道路を撤去して川を取り戻すというビッグプロジェクトをソウル市が行ったのです。

事業前のこういう道路を撤去して、狭くして潤いのある川を再生しようといわれました。2002年くらいから始まり、確か去年終わりました。わずか3年間で、延長5.8kmの川を取り戻したわけです。ソウルのど真ん中です。東京でいえば銀座、福岡でいえば天神、鹿児島でいえば天文館というような場所です。これは驚くべきスピードで進みました。

【川を治める者は国を治めるとなるか】

この推進者である李明博（イミョンバク）氏は、現在ソウル市長を辞められて、次の大統領選挙に出ると間違いなく通るといわれています。川を治める者は国を治めるとなるかどうか、ソウルではそういう状況です。これがオープニングです。100万人が来たといわれています。今でも毎日9万人が来ると一年間に3千万人と経済効果もすごい。地価も上がった。最初はすごくもめていたのですが、うまくいきましたね。この改修をやる時も、道路がなくなるわけですから、交通が混雑するのじゃないかと、関係する周りの商店街も多くて交通量が減りますから、心配して何度も何度も住民説明会をしました。約千回の説明会をしたといわれています。

道路を壊すことによって、当然渋滞が予想されますが、ソウル市の対策は、市内に入ってくる車全体を抑制しようと、まず市内の駐車場の料金を上げて、かわりに地下鉄やバスの運送回数を増やしました。要するに交通量自体を減らす対策をやり、見事

に成功しました。日本ではたぶん、この交通量を減らすという思い切った判断を下すことができない。ソウル市はアジアの中のリーダー的な都市として、環境都市というのを打ち上げています。それで世界中から高く評価されています。

【地域の合意形成が問題の釧路湿原再生】

日本で最初に行われた自然再生事業が、釧路湿原の自然再生です。これは1980年当時の環境に回復しようと自然環境の保全、農業、地域づくりへの貢献という三つの軸で環境省が中心になっている事業です。ここは今一歩うまくいっていません。これが全体の様子で釧路湿原は一番下流にある大規模な湿原です。釧路湿原も何十年間のうちに面積が減っているのでこれを食い止めようというわけです。

どうして湿原が減ったのか、原因を探っていくと酪農をやっているので湿原に悪いということが明瞭になってきました。あまりそれを言い過ぎると酪農家が付いて来れなくなるということもあって、地域との合意形成が今一歩うまくいっていない状況です。

【コウノトリと共に生きるまちづくりの基本条例】

一方、自然再生でもううまくいっている例があります。一番良いモデルが兵庫県豊岡市のコウノトリの自然再生です。豊岡市が中心になりながら、コウノトリ条例を作り、地域ぐるみでコウノトリを保全する。コウノトリが住んでいることを地域の誇りとし、米をブランド化する。コウノトリ米は普通のお米の3倍の値段で売れているそうです。そういう様々な農業系の事業や河川系の事業を組み合わせながら、コウノトリを野性に返すことをやっています。日本でコウノトリは一時5羽まで減り、それを捕獲して増やしていったわけです。コウノトリと共に生きるまちづくりのための基本条例。これが前文です。とても素晴らしいので読んでみます。

私たちのまち豊岡は、緑豊かな山々に抱かれた豊岡盆地に開け、街の中央をゆるやかに流れる円山川の流れをはじめとする豊かな自然の恵みを受け、今日の繁栄を築いてきました。特別天然記念物コウノトリもまたそのような豊岡の自然の中で人々と共に暮らしてきた。コウノトリはかつて各地に見られたが高度経済成長の進行に伴う環境の破壊によって絶滅への道をたどり、豊岡盆地一帯が最後の生息地になった。そのような中で種を守るために保護運動が始まり、人工飼育が進められたが、四半世紀を経ても新しい命を目にすることはできなかった。最後のコウノトリを捕まえてずっと人工増殖を繰り返してきたが一羽のヒナも生まれなかったのです。しかし平成元年の早春、ついに雛が誕生し、私たちは感動と歓喜に包まれた。今私たちはコウノトリを再び野に返すための地道な努力を続けている。このように私たちはコウノトリの絶滅と復活の歴史を目撃し体験してきたのである。

これが条例の前文です。すごく熱い情熱です。まだあります。

一方、コウノトリを絶滅の淵に追いやった飛躍的な経済社会の発展と生活様式の変化は環境への負荷を増大させ、地球温暖化、ダイオキシン、環境ホルモンなどに見られるように、今や地球環境と人間の生存自体

羽を休めるコウノトリ



も脅かすまでに至っている。私たちはまさに人間全体の環境問題に全力をあげて取り組まなければならない。このような認識に立つとき、私たちは人がコウノトリと共に生きていくことができる環境こそが人にとっても素晴らしく豊かな環境であるとの確信に至るのである。今こそ私たちは英知を結集し、人と自然が共生するまちづくり、循環型のまちづくりおよび環境に優しい人づくりを柱としてコウノトリと共に生きるまちづくりを進める。人と自然の輝くまち豊岡を継承していくことを決意しこの条例を制定する。

何とも素晴らしい条例です。こういう市の方針に従いまして、みんなが協力して豊岡でのコウノトリ再生の一步を踏み出したということです。数年前、紀子さんがコウノトリを放鳥され、最初の一羽が野に返ってきたわけですが、その後すぐご懐妊されましたが、今コウノトリの里は、子宝に恵まれるということで大変な人気です。

〔自然と共生した社会を取り戻そう〕

これはコウノトリと牛とお嬢さんが一緒に川の中を歩いている写真です。この一枚がコウノトリ再生のイメージ写真として広がり、多くの人に自然と共生した社会を取り戻そうと運動が始まったのです。この方はまだご存命で、今おばあさんですが、その方にお聞きすると、私は川でコウノトリと歩いていた記憶はないとおっしゃるそうです。そのくらい当時はコウノトリを意識することもなく暮らしがあったということです。わずか何十年かでそういう暮らしを失ってしまったのです。

これがコウノトリです。とってもきれいな大きい鳥です。この間行ってきましたら、本当に野原にコウノトリがたくさんいました。サギなど他の鳥と一緒にいました。ここを小学生が通っていましたが、こういう姿を見ながら、子供達も環境の重要性を実感できるのだらうなと感じました。

これは合鴨米をやっているところです。コウノトリという生き物を中心としたまちづくり条例は日本で珍しい例ですが、うまくいっています。コウノトリのグッズもたくさん販売されています。これはコウノトリの郵便ポストです。

【琵琶湖再生は干拓した内湖を再び湿地に】

その他、日本中で色々な環境再生が進んでいます。私が委員長をしていた早崎内湖という琵琶湖の再生です。これは少しねじれた環境再生ですが、それでもやっと今地域もその気になってやろうとしています。滋賀県は琵琶湖あつての県で、最近女性知事が誕生したことで有名です。琵琶湖に接する小さな湖のことを内湖と呼びます。内湖を40年前に干拓して水田にしました。しかし、その水田は後継者がいないとか、やっぱり昔湖だったので質の悪い水田だということでリゾート法ができたとき、ゴルフ場にするという話が出てきました。県が買い上げようとしていた矢先、バブルがはじけてリゾートがだめになったのです。地元の人には土地を買ってくれるというので楽しみにしていたのですが、残念ながらそうはならなかった。今ではラムサール湿地という環境を守るための湿地に指定されたことから、かつての内湖に戻そうということでこの検討会が始まりました。ただし、昔のような湖に簡単に戻るかというところがさうはいかない。

こちらが内湖でこちらが琵琶湖です。内湖で様々な漁をやっていました。ここはフナが多かったとか、フナが産卵してたとか、人が生き物を捕ったり、藻を取って肥料にしたり、人との関わりはこういう小さな湖の方が自然との関わりが深かったのです。そういうものを復元再生しようということです。地元の人には、ここは湧き水が湧いていたとか自分たちで昔の思い出の地図を作って、それを元にして再生して欲しいということです。ただ外来魚の問題や色々な

問題があります。

【土地改良区が作る「魚のゆりかご水田」】

この地域の周辺では「魚のゆりかご水田」というプロジェクトを土地改良区がやっています。こういう田んぼの下の方は排水路になっています。それを徐々に上流からせき上げてきてドジョウとかナマズとかフナが入って行って産卵する。土地改良区が昔は土地を改良していたのですが、今は水路を一所懸命改良して「魚のゆりかご水田」を作っています。産卵するときには、肥料とか農薬の使用を少し抑えてやるので、収量が若干落ちるらしいですが、それでもお米は2倍くらいの値段で売れるそうです。

魚のゆりかご水田



今お話ししたように、環境再生はだいたい二つの軸があります。一つは自然を再生する軸、もう一つは景観とか歴史を再生する軸です。先ほどの韓国の例は景観とか歴史の例です。早崎内湖とか釧路湿原は自然を再生する軸です。それを中心にしながら暮らし自体を見直していくというのがとても重要なポイントになります。

これは横浜の都会を流れる川です。これが改修する前です。皆さん、この川を見て改修しようという気が起こるでしょうか。横浜市職員は偉いと思ったのですが、私は20年くらい前に連れて行ってもらって見

たのです。「島谷さん、向こうに山が見えるでしょう。あそこまで川にするからね。」といたので、「本当？うそでしょ」と言ったのですが、20年くらい経って去年見に行ったらこんな立派な川になっていました。

これは横浜の住宅地を流れる川ですが、この川ができたことでおそらく地価も上がったでしょう。人々は遠いところから電車で遊びにやってきます。都会の中にこんな自然の川が復活したという例です。

人間というのは素晴らしいと思います。構想力とねばり強さとお金は色々集めてくるらしく、一つの事業としてやった訳ではないようですが、こういう川を20年くらいかけて再生してしまう。去年、土木学会のデザイン賞の最優秀賞を取ったものです。わたしの友人がやりました。

話せばきりが無いのですが最後に一事例だけ。アザメの瀬という自然再生事業についてお話しします。私が3年半前に九州大学に職替えしたのですが、それまで国土交通省に勤めていまして、そこで佐賀の武雄河川事務所で行った自然再生プロジェクトです。名前はアザメの瀬自然再生で目的は人と自然のふれあいの再生ということと、氾濫するような場所である田んぼに依存している生き物を再生しようというものです。

地域の人が集まって役所の人と相談しながら、繰り返し話し合うというのがポイントで、だいたい月に1回やっていて、今まで60回の検討会をやっています。

[話し合い、模型を作って、孫に魚取りを教えるのが合い言葉]

こんな形でみんなが輪になって話し合いながらこれからどうしようか相談してやって来ました。みんなでこんな模型を作り、「アザメの会」が立ち上がり、年配の男性が中心になって、孫に魚取りを教えるのだというのが合い言葉になって活動を展開し

模型を用いての意見交換



ています。

これができあがりのイメージで、昨年できました。川がこう流れていてここを深く掘ってあって、雨が降ったら下流の方からずっと水が入ってきて、全体が水没する。ここで魚が卵を産む。上流の方には棚田があって、子供達と稲を植えて稲刈りしたり、そのお米を使ってもちつきをしたりしようというものです。

これは洪水の時の写真ですが、下流に網を仕掛けておきますと、洪水の時にナマズがどっさり入ってきて卵をたくさん産む。

[自然再生の対象は人と人の関係から地域、暮らしまで]

最後にまとめますと、いよいよ日本は再生の時代に入ってきました。元々日本の暮らしは自然との共生の中にあっただけです。自然の再生は単に再生だけでなく、人と人との関係を再生したり、地域を再生したり、暮らしの再生をしたりという方向に向かって行くことによって、再生が楽しいものになります。

今日はリュウキュウアユの問題ですが、ぜひリュウキュウアユを通して奄美の地域全体を活性化して、楽しい自然と共生した暮らしができることを願っています。

■特集：シンポジウム「奄美の地域づくりとヤジの再生」 －リュウキュウアユフォーラム2007－

現地報告：「リュウキュウアユと地域の活動」

井上恒和（ヤジ友の会）

元田信有（宇検想い隊）

早川雄介（奄美市立東城小中学校）

司会：次はリュウキュウアユについて地域の中で活動の事例があります。「ヤジ友の会」、「宇検島思い隊」、奄美市立東城小中学校の3名の方から、今の地域活動につきましてご紹介をして頂きたいと思います。では最初に「ヤジ友の会」の井上さんからご報告頂きます。

【川遊び、ヤジ捕りのできる川の復活を】

井上：「ヤジ友の会」の事務局を預かっております。

「ヤジ友の会」は2005年2月6日に発足しました。今年3年目になります。活動は最初は川を眺めているだけだったのですが、2006年6月4日に身近な水環境全国一斉調査で、住用町の住用川2点、役勝川、川内川、金久田川、山間川それから宇検村の河内川の4点の水の調査を実施しました。この時の水調査では、大変立派な水質でして、水道水よりきれいな水だとも聞いております。

それから2006年7月23日に、鹿児島県環境技術協会主催による川の生き物観察会があり、私たち「ヤジ友の会」でも会場設定などしながらお手伝いさせて頂きました。

2006年8月27日には住用川のアユを食べるコイがいるのでこれを駆除しようと有志が集まって二カ所ほど網を設置して捕りにかかったのですが、魚の捕り方を知らな

かったものですから、一匹も取れずに残念でした。

2006年の8月30日は本土から奄美体験交流として来られた方と「ヤジ友の会」の與島君と一緒に参加して交流を深めたりしました。

2006年11月11日、宇検村でマングローブ（ナギ）を増やすと聞いていたので、與島君と住用のナギを持って宇検村に行き、宇検の活動グループ代表にナギの苗を渡しました。

11月23日には大島新聞の中山記者から電話があつて、戸口川でヤジが見つかった、確認をして欲しいという連絡を受けました。與島君と戸口まで行ったのですが、水かさが増して実際には確認することができませんでした。状況からして、ヤジが棲息できる川だという感じを受けているのですが、是非戸口川でもヤジが群れ泳ぐ姿を復活させて欲しいと思います。

11月29日にはヤジを始め、魚たちの住める川を守ろうという看板を設置しました。少ない予算の中からはじき出して、2個の看板をこしらえて、役勝川と住用川に設置致しました。

2007年3月の24日には、名瀬市の合併一周年記念の祭典で「ヤジ友の会」紹介のための展示準備などもしております。

私たちは昔のように川でヤジを捕り、塩

焼きでおいしいご飯を食べ、おいしい焼酎を飲む、そんな川の復活を願っております。それと同時に河川の周辺で織りなす自然環境がもっと豊かになって、これからの若い方々に引き継いでいくのも私たちの責任ではないかと考えております。

司会：ありがとうございました。ヤジを肴に焼酎を飲みたいというのが本音とのお話だったようでございます。引き続きまして、宇検想い隊の元田さんによろしく申し上げます。

【水辺の植物を再生し、景色と生き物を取り戻したい】

元田：宇検想い隊（しまおもいたい）と呼んでいただきたい。まだ出来上がって間がないものですから、ここでは発足と活動の状況をご報告させていただきます。

私は1950年の生まれで、宇検村の焼内湾の湾奥の湯湾に住んでいます。焼内湾は深い湖みたいな外海が見えない場所です。小さい頃、湾奥から海を見ていて、山から水際まで茂った緑が海面に映る景色が何とも言えない思い出として残っているのですが、近年どうも様子が違って来たと感じていました。もう一つは、10年ほど前、四宮先生の教え子の鹿大水産学部の学生さん達が河内川の生物の研究できており、私が働いている公民館に寝泊まりしていたものですから、よく学生達と話をしました。議論すると宇検村とか奄美の自然はすごくいい。川も素晴らしいのに、昔いた色々な生物がいなくなったのはなぜだろうということになりました。

そのころ四宮先生とお話する機会があり、色々なことを聞きました。宇検には水辺の植物が少ないのではないかと。住用に行けば、マングローブが豊かに広がっている。焼内湾はきれいだけど、何か物足りな

い。そこで水辺の植物が何とか再生できれば景色も戻ってきて、動植物も保護できるし、アユもたくさん出てくるのではないかと思ったのです。

干潮時のマングローブ林



先ほどの話の中でも焼内湾に注いでいる河内川のアユが激減しているとありました。一つの原因だけではなく色々な要素があると思うのですが、地元として再生させ保護する手伝いができないかと思いながら、若い人々に声をかけました。結成は2006年7月5日で、若者6名に、私は50代ですが、30代40代の方も集まっています。

2006年11月19日にヒルギの植栽をしました。それから12月3日は河内川のアユの産卵場作りに地域の子供達を集めて先生の協力を得ながらやりました。

活動としてはこれから干潟の再生・ヒルギの植栽を毎年続けていかなければと思っています。またヤジ友の会と連携して河内川のヤジの保護、増殖の活動ができないか。そのためには我々が何をすべきか、環境についての勉強をしなければなりません。宇検村の歴史と文化、自然環境についての研修・研鑽の勉強会をやりたいなと思っています。

一番大切なことは、我々50代60代は体験をしてきたのでいいのですが、これからの子供達に素晴らしい自然を残したい。その

ためにはどうしたらよいか、子供達にかかわって一緒に勉強していきたい。まだできて一年、会員も10人に足りません。宇検村だけでなく、多くの所から叱咤激励やご協力を願いたいと思います。

司会：ありがとうございました。元田さんも団塊の世代で、さんざん今まで環境を壊してきた一員でもありますので、これから心をあらためて環境再生に向かっていきたいという決意表明の一部だと受け取りました。ありがとうございました。

3つ目の地域活動です。奄美市立東城小中学校の早川先生にご報告をお願い致します。

【生命の大切さ、奄美の自然の豊かさを子供たちに伝えたい】

早川：みなさんこんにちは。

本日は東城小中学校で行っています、リュウキュウアユに関する授業を通しての取り組みをご報告したいと思います。

数年前に学習指導要領が変わり、全国の公立の小中学校に総合的な学習の時間が設けられました。一般の国語、算数、理科、社会などの授業と違いまして、例えば環境とか平和、郷土、福祉、国際理解などそれぞれの学校が独自にテーマを掲げる。工夫を凝らし、特色あるさまざまな取り組みで行う活動時間、これを総合的な学習と呼んでいます。

我々は次の世代を担う子供達に何を伝えていこうかと考えたとき、生命の尊重、大切さを伝えていきたい。そして何より奄美大島に暮らしていますので、自然豊かな環境をぜひ子供達に受け継いでもらいたい。我々の東城小学校はリュウキュウアユの棲息している川内川のすぐ近くにあります。以前 PTA の家庭教育学級で、四宮先生などを招いて講演会をしました。そんな縁もありまして、平成17年度から「リュウキュウ

リュウキュウアユの卵をさがす



アユを守る」ということを大きなテーマにして、総合的な学習の時間を進めています。

活動内容は、大きく分けて年間に4回は外に出て活動、2回はまとめの時間を取っています。第一回は5月、地球規模全体から見た奄美大島は亜熱帯気候で特色があるというようなことを鹿児島大学の四宮先生や環境技術協会の米沢主査などに子供達に話をして頂きました。また、実際リュウキュウアユはどういうものかということで、リュウキュウアユや稚魚の標本を観察することも行っています。

第二回目は川内川に出向いて、川に入ってさまざまな水生生物の観察や実際泳いでいるリュウキュウアユを観察する活動です。子供達も非常に楽しみにしている活動で、7月頃になります。夏の日差しの強い時期で川に入っ、子供達も大喜びです。網などでタナガ（テナガエビ）を捕まえたり。こういうものが自分たちの身近に暮らしているということを学習しています。

第三回目は11月に行われます。11月はリュウキュウアユが産卵の時期に近づいています。川内川にいてリュウキュウアユの産卵場を作ろうと。クワで川底を耕すような感じで溝を作って流れの早い場所を作ってリュウキュウアユが卵を産みやすいような状況を作っています。

第四回目は振り返りの時間で、年を越した1月に第五回日の学習が始まります。11月に作った産卵場に出向いて、実際に産卵してくれているか確かめます。小さな小石・礫をすくい上げて小さな1ミリの卵を探します。実際先生方に準備して頂いた受精卵の観察も行っています。実際どんなふう

に発生していくのか、ここが目だよ、といった説明から、顕微鏡を使って観察したりもします。

[この自然を誇りに思う、絶滅させるわけにはいかない、との感想]

子供達からは

- ・この自然を誇りに思う。
- ・地球温暖化もリュウキュウアユの生態に大きく影響することを知った。
- ・独特の生態系のことも知り、絶滅させるわけにはいかないと思った。

というような感想が寄せられています。

夏になると子供達にとって川は泳いだり、テナガエビを捕ったり、格好の遊び場所ですが、この自然が当たり前だと思っているかも知れません。実は大変貴重で素晴らしいんだと、年々少しずつ形が変わってきてリュウキュウアユが棲めなくなるようなこともあるのだと気づいてくれればいいですし、自分のふるさとへの愛着や誇りを持ってくれるなら、いい学習活動の一つではないかと思っています。

最後にこのような活動ができるのもたくさんのご協力があったことです。お礼を申し上げて東城小中学校からの発表を終わります。

司会：ありがとうございました。今の子供達も後7、8年経つと成人になります。こういう教育を受けた子供達がヤジの再生と一緒に取り組んでくれたらと思いました。

■特集：シンポジウム「奄美の地域づくりとヤジの再生」 －リュウキュウアユフォーラム2007－

パネル討論：「ヤジの再生と地域づくり」

中野 実（鹿児島県大島支庁長）

塩崎博成（奄美市企画部長）

和田美智子（サン奄美）

鍵和田敏子（奄美エコ探偵団）

四元健治（あぶし会）

四宮明彦（鹿児島大学水産学部）

島谷幸宏（コーディネーター）

島谷：いまから4時半まで、パネラーの方々に色々な話を聞きながら、「ヤジの再生と地域づくり」について考えてみたいと思います。

最初にそれぞれの方がどのような活動をしてられるのか、自己紹介を兼ねてお願いします。中野さんからお願いします。

【ヤジ再生は世界自然遺産登録の柱】

中野：本日の「奄美の地域づくりとヤジの再生」ということですが、私ども大島支庁としましても、基本的には奄美の地域づくりが一つの仕事でございます。その中で、私どものヤジとの関わりですが、この3月異動する職員にアンケートを採ってみました。奄美で素晴らしかったこと、何をして欲しいか、と。その中で非常に航空運賃が高い。家族に会いに行くのに運賃が高いので、航空会社を二社にして欲しい。とそのような意見がありました。しかしながら、以前は二社あって、乗る人が少ないから一社になったわけです。着陸料の免除とかいろいろやっているんですが、これ以上の減免は厳しいということです。今後奄美の人口も減っていく中で乗客を確保しないと乗

客の空路も航路も現状のままの維持は厳しくなることが予想されます。そうすると交流人口を増やしていくしかないのかなということですね。

屋久島が世界自然遺産になっています。世界遺産になる前と後では人口は変わっておりません。それに比べて、奄美はこの間1割の人口減少です。観光客についても前と後を比べてみますと、屋久島では1.7倍、奄美ではその間2割減っている。世界自然遺産の効果はあるということで、今一所懸命登録に向けて、取り組みをしています。その奄美の自然を生かす一つとしてヤジの再生も大事ではないかと思っています。

島谷：ありがとうございました。

世界自然遺産に向けて大島支庁では頑張っておられる。世界自然遺産という大きな夢の中の一つの重要な柱としてリュウキュウアユがあるのではないかという話だったと思います。続いて、奄美市企画部長の塩崎さんをお願いします。

【ヤジを通して地場産品発掘やブランド化を】

塩崎：こんにちは。奄美市企画部長の塩崎

でございます。よろしく申し上げます。私はこの4月から奄美市の企画部長になりました。

リュウキュウアユを絡めた地域興しという観点から話をさせて頂きたいと思えます。世界に誇れるリュウキュウアユの生息する、住用地区の魅力は何かと私なりに考えてみました。それは山であり、川であり、海であり、豊かな自然だと思います。私が住んでいます笠利地区とは全く違う山の茂りがあり、川にはリュウキュウアユが棲息します。マングローブが自生するまさに自然の豊かさを感じる所です。

奄美市では昨年の3月20日に旧名瀬市、住用村、笠利町で合併をしました。その一つの事業として「一集落一ブランド運動」を推進しているところです。集落の宝となりうる農産物、あるいは文化財、自然環境など奄美市がブランドとして認定を致します。その宝の価値や魅力を伝える人材の育成、産業振興や観光のPRの目玉の宝の全国発信をしようという企画です。リュウキュウアユを認定し、地域から奄美市へさらには奄美の宝としてリュウキュウアユの持つ宝の価値や魅力を全国発信することで地域の活性化やひいては産業の振興策へも通じているのではないかと感じているところです。

島谷：ありがとうございました。「一集落一ブランド運動」をされているのですね。それでは、「サン奄美」の和田さんお願いします。

【伝統食を若い母親や子供達に伝えたい】

和田：こんにちは。「サン奄美」の和田道子です。私たちの「サン奄美」というのは生活研究グループが発展的に企業活動をして「サン奄美」となりました。

元々生活研究グループ活動の中で、地域

にある特産品を商品化して、地域のイベントなどで販売していました。それが行政から、建物の委託を受けて、今まで培ってきたものをさらに発展させて「サン奄美」という事業に取り組む転換がありました。企業活動はしていますが、母体である生活研究グループの目標を大きく達成するための一つの活動と位置づけています。

サン奄美の販売所



地域で取れた農産物を加工し、商品化して販売していく取り組みと、今さかんに言われている地産地消活動の一環として月一回朝市を開催しています。その朝市は「サン奄美」の仲間や農家の方々が自分の農産物を持ち寄って、直接消費者と相対して情報を発信したり、消費者の声を聞いたり、顔の見える活動をしています。それと住用町の学校が三校ありまして、その子供達の食能教育や職場体験学習の支援をしています。

「サン奄美」という一つの職場で子供達を受け入れて、住用で取れる農産物はどんなものがあるか、その農産物を活用してどのような商品ができるのか、子供達に伝えています。食の伝承活動は、先輩方が伝えてきた食生活、伝統食の形が薄くなってきたので、もう一度この時代にしか伝えられないものを若いお母さんや子供達に伝えていきたいと思っています。

島谷：ありがとうございました。川の生き物を利用した食はたくさんありますか？後

でお話下さい。それでは鍵和田さんお願いします。

【農、食、エネルギーを通して自然共生型の暮らしを学ぶ】

鍵和田：こんにちは。「奄美エコ探偵団」のサポーターをしています。「奄美エコ探偵団」というのは、環境省が音頭を取ってやっています、子供エコクラブの一つです。五年前に登録してから、月一回くらいのペースで活動しています。

これまで奄美の森や川や海に親しむ自然観察会やエコキャンプ、ゴミ問題や地球温暖化について学ぶ見学会、名瀬市街のエコウォッチング、エコマネー事業への参加などがその内容です。中でも継続しているのが、名瀬市和光園の一角に畑をお借りして、季節の野菜を作り、収穫し、調理して子供達に味わわせるものです。農、食、エネルギーなどを通して島の昔ながらの自然共生型の暮らしを学ぼうとしております。

最近の島の子達はいくら田舎の子といっても現代っ子で野菜が嫌いなのですね。それで特に意識して、わざと島ならではの食材を植えることにしています。ニガウリとか地這いのウリ、ハンダマ、というのはスイゼンジ菜、フルはニンニクのこと、フダンソウとかチバサなどを作ったり、調理して島の味を覚えてもらいたいなと思ってやっています。

今スーパーに行けば、子供達が普段自分の家で食べるようなニンジンとかジャガイモ、カボチャ、おいしい果物とかは簡単に手にはいるし、その方が料理もし易いのですが、それぞれそういう野菜はどこからやってくるのかなと子供達に考えさせたり、調べさせたり、本当はいつ取れる野菜なのかなと話したりしています。

そこで実はたくさんのエネルギーをかけて食卓にやってくるのだと分かれば、島で

できる野菜を食べることの意義も頭と体と舌で分かってくれるんじゃないかなと思っています。

もう一つ活動の柱になりつつあるのが、リュウキュウアユとの関わりです。私が「ヤジ友の会」の会員でもあるという縁もありまして、友の会の活動にエコ探偵団の子供達を連れて行って参加させてもらっています。6月には全国一斉の水質調査をやりましたし、夏はリュウキュウアユ保全研究会の先生方の指導の元に子供達が実際に川に潜ってアユを見るという体験をさせてもらいました。冬は同じく保全研究会のお手伝いとしてアユが産卵のしやすい川床作りということで参加しました。

川に潜ってアユを目の前で見た子供達はアユの縞模様がきれいだとかかわいいなと言っています。でもこれがおもしろいかなと思ってみてくれるようになったら、子供達の頭にもしっかり島の食材への愛着が根付いたことになるんじゃないかと思っています。

島谷：ありがとうございます。

それでは続きまして四本さんをお願いします。

【田んぼ復元で子供たちに農業体験を】

四本：こんにちは。芦花部という小さな集落から来ました四本です。

芦花部というのは本当に小さな集落でして、年寄りばかりという感じの所です。平成3年頃たしか3枚ぐらい残っていた田んぼが、県道拡幅工事で全部つぶされて、それ以来田んぼがなくなっていました。私たちが芦花部で田んぼを復元させたのは、海岸のすぐ近くで、そこはおそらく平成以前にも作っていなかったと思います。田園風景が欲しいという思いがあったのですが、ちょっとしたことから、それをやろうということになりました。昔はクワやカマでやっていたのが、今はトラクターなん

というすごい機械がありますので、あっという間に田んぼが復元できました。平成15年にとりあえず、田んぼ一枚を作りました。

【古代米には夢がある、奄美にふさわしい】

黒米を作ろうと決めた理由ですが、奄美は耕地面積が狭いところで我々が小さい頃は二期作をやっていたのですが、二期作といってもたかだか知れているような面積ですが、そこに黒米を作れば白米より値段もいい。要するに効率のいいものを作ろうじゃないかと。それから古代米というと奄美にふさわしいようなこともあり、夢があるのですよね。高価だということは需要が大きい。黒米が成分的にたんぱく質が良いのだらうと思いますが健康食としてもはやされていて、実際にあっという間に売れてしまうので、ちょうど良かったかなという気がします。

実際に作り出して田植えをすることになり、会を作って継続していこうということで「あぶしの会」を立ち上げました。「あぶし」というのは奄美の方言で畦のことです。豊作になると「あぶしまくら」というのです。私の住んでいる芦花部の隣に秋名という集落があります。そこで豊作を願う「しょっちょがま」という行事がありますが、あの中に出てくるのも「あぶしまくら」です。

市街地の人と交流するには子供達を呼べばいいのではないかと。子供に自然体験させるというのを目標の一つにして、荒廃地を元に戻そう、少しでも田園風景を取り戻そうよということと、子供に自然体験や農業体験をさせることをキャッチフレーズにして、家族単位で一戸年間千円の会費で、誰でも入ってきて下さいということで「あぶしの会」を始めました。とにかく始めると楽しいのでしょね、一番はじめての田植えの感想を聞いてみましたら、年寄りも子供

も、やって良かったというのがほとんどでした。

機械でなくて手作業ですから、苗を運ぶ人から、植えるときに綱をはる人も必要、代掻きする人も必要。必要な仕事は分担されていって、自然な形で手渡ししていって、そのうち「ひもを持ち上げろ」といってばんと上がるし、苗がなくなって「ちょうだい」といって飛んでくる。そういう人と人のつながりです。

平成16年度に第一回で38所帯、50人が集まりました。平成17年度81家族、平成18年度は87家族、平成19年度は103家族になっています。やればだんだん良くなっていく。楽しいからだと思います。楽しければ続く、やれば課題も出てくるが課題も何とかクリアする知恵も生まれるような気がします。島谷：ありがとうございます。四宮先生、何かお話がありますか？

奄美では数少ない田んぼ



【田んぼ復元はヤジ再生と関連】

四宮：私は鹿児島で合鴨米を7年作っています。さっきご飯を食べながらみんなで話してたら、奄美は内地と違って、冬が暖かいから害虫も死なない、草取りが大変だということでした。それは合鴨を使えば解決できます。完全無農薬で草取りは鴨がやっ

てくれます。お米を作るというプロセスを子供達に見せる、そして合鴨も育てて、冬クリスマスの頃つぶします。それも子供達にやらせる。そして命を頂くという教育ができます。これは私の米作りの師匠の萬田先生の受け売りの部分もありますが、私自身もやってみて素晴らしいと思っています。ぜひ奄美にこれを普及させたい。

田んぼとリュウキュウアユとの関係は、どこにあるかと言えば、昔の田んぼは川沿いにあったのです。近くの農地で土砂が流れ出したりするのをここでいったん受け止めてくれた。その水田がゆっくりと水を川に返してくれた。ということで水の循環の中で一種のクッションの役割をしていたのです。その他にも田んぼにはメダカやフナやドジョウが来るんですね。いわゆる身近な水の生き物。それを今みんな忘れてるんですね。メダカが絶滅危惧種になる時代。ぜひ奄美の子供達にその楽しさを伝えたいと思います。

島谷：食の話がたくさん出てきたのですが、川の生き物を利用した食を少し教えて下さい。和田さん。

【カニの「ふやふや」、アユの「うるか」】

和田：住用でアユがたくさん捕れていた時代に、産卵場に集まったアユを「ツキヤジ」といいます。そのとき投げ網をかけると何百というアユが捕れて、その内臓を塩辛にしました。それを半年くらい置きますと、すごくおいしい塩辛になります。元横綱の朝潮がこれは「うるか」といって貴重な食べ物でこんなにドンと出すものではない。杯にちょっと出すくらい高価なものだよと教えられました。それを温かいご飯の上のせて食べたり、お酒のつまみに出したり、お茶のお供に出したり、常時アユが捕れていた時代にはそうしておりました。

それから子供達の伝承活動では、今住用でしか作られていないテナガエビの「ふやふや」というおつゆがあります。カニで作るとカニの「ふやふや」。今の若い方々はあまり作らないので伝承講座の中に組み入れて教えています。

島谷：おいしそうなものばかりですね。カニもたくさん捕れるのですか。

和田：今はそんなにたくさんは捕れないのですが、私の子育ての頃は、一日川に行きますとバケツ八分くらい捕れました。家に持ち帰って、一升枡で量って「今日は何升捕れた」と自慢をしたものです。たくさん生き物が豊富に捕れていました。

島谷：リュウキュウアユを食べようという話が出ていますが、四宮先生も提案されていましたが、リュウキュウアユ自体が絶滅しそうになっているじゃないですか。そういうことと養殖とをどういうふうに考えればいいのでしょうか。その辺を。

【養殖は川とヤジへの関心を高めるため】

四宮：奄美に行ったはじめの頃は天然のアユが大事で、今どこにどれくらいいて、どういう状況なのか、その調査から入りました。もちろん天然アユの状況は、まだ捕獲して食べましようよという状態ではないのです。現在県条例で、天然魚は捕獲禁止という状況にあります。

ただこのままでは、ヤジという存在がみんなの関心から外れていってしまう。川そのものへの関心がなくなると保全の事業もうまくいかない。これでは困る。

一方では食べたいという声はあるわけですから、これに対応するには養殖しかない。養殖は本土のアユではうまくいっていますが、リュウキュウアユは難しい。本土のアユとは違う。それについては本気でやらな

いと、十分なところまで行っていません。

島谷：皆さん、おわかりいただけましたか。リュウキュウアユを保護するためには関心を持っていただかなければならない。例えば観察を通してリュウキュウに興味を持ってもらって、養殖のリュウキュウアユを食べていると天然のものを食べたくなる。天然のアユがたくさん棲めるいい環境にしようと連鎖を期待しているというようなことだと思っただけですが。そういう意見に対しては？
どうぞ、中野さん。

【精神論だけではだめ、経済活動が伴ってこそ】

中野：今食べるという話が出ていますが、昨年4月に来たときにリュウキュウアユを食べることはできないかと言ったら、「とんでもないですよ」と「リュウキュウアユは禁止されています」。「養殖してできないのか」。「養殖するものどうのこうの」と職員の中にもアレルギーがありました。

私は基本的にはそういう資源を活用した地域づくりができないかと言いたい。ただ守るだけ、精神論だけでは長続きしない。経済活動が伴ってそれで地域づくりが持続するんだろうと思います。

話は変わりますが、鹿屋の私の出身地の柳谷（やねだん）で地域づくりが行われています。自分たちで甘藷を作ったりして、その収益を元にして行政に頼らない地域づくりをしています。私もさっき初めて聞きましたが、「ふやふや」というのがあるということです。そういうのを食材として出してもらおうと皆さん興味を持つと思います。

ヤジを食べさせるようにしてというのは、我々が旅行をしたとき、そこでしか食べられないものを食べたい。どこでも食べられるものには興味はわかないわけですから。

リュウキュウアユは奄美にしかない。奄美で味わえることが地域づくりに役立つと私は思っております。ですから、そういう食材を用意できるようにし、一方では養殖をする。一方では自然。そういう清流に棲むアユがいるんだよ。地域づくりとあいまってリュウキュウアユの価値が高まっていくと思います。

先ほどの四宮先生の講演の中でもあったわけですが、5年で世界自然遺産への登録、10年で天然アユを解禁。最終的には天然アユを食べるところまで持って行きたいとお話でしたが、お互い全員の願いであらうかと思っております。

【かつては正月の吸い物に使った干しヤジ】

かつては住用では正月の吸い物に干したリュウキュウアユが添えられ、食べられるということで貴重な食材、地域の食文化と深く地域に根付いていたということです。自然の川のリュウキュウアユを捕って、食べていたということはそれだけ多く棲息していた時代もあったということだろうと思います。

今後、アユの個体数をいかにして増やすかということが不可欠ですが、奄美の大切な宝であるリュウキュウアユの棲める川の環境を整え、再生保護することが必要なのではないかと。保護活動につきましては、奄美ヤジの会や地域の方々が、コツコツと続けておられるようですので、緻密な活動の輪が今後大きく広がり、さらには地元から奄美の人々の関心と呼ぶことによって環境の保護にもつながって行くのではないかと。思います。

地域住民、子供達を対象とした環境学習を開催する。この場合、住用の住民、子供達だけでなく、名瀬、笠利の住民、子供達へも呼びかける。これも合併による一体化の取り組みとして、位置づけされると思います。

【島の食材を知っている人は、貴重な存在】

鍵和田：先ほど四宮先生が自然のアユにこだわりすぎると住民の関心がアユの存在から遠ざかっていくというお話がありましたね。

私自身は、リュウキュウアユそのものも島に生まれ育っているながら、最近まで知らなかったのです。アユが上ってこない川の地域に住んでいたものですから。ヤジ友の会の方とお知り合いになってはじめて観察したり、去年初めてマングローブパークで和田さんがお料理されたのを頂いて、小振りのものだったものですから、食べやすく意外とおいしいんだな、と新たな奄美の味に触れることができよかったなあと感じています。

ヤジの塩焼き



だから、島の食材を知っている人、味が体に染みついている人たちは、貴重な存在ですね。でも現実的には味を知っているからこそ、こっそり捕って食べている人たちもいるんですよね。そういう人たちにはまだ情報がいき渡っていないとかまた、感覚がルーズでたくさん泳いでいるから、まだ大丈夫じゃないのと思っている方もいらっしゃるんでしょね。そういう人たちにちゃんと認識を持ってもらえると、島の食材の味を知っているからこそ強い味方になってくれると思います。

島谷：いいご意見ですね。

四本さん、打ち合わせの時にお話ししたら、「私は田んぼのことをやっているから、リュウキュウアユのことはあんまり関係ないんだよ」とおっしゃっていたんですが、いろいろなお話を聞いて感想でもあれば。

【田んぼ復元は都市との交流でこそ】

四本：そうですね。奄美の地域づくりというのが入っていますので、その地域づくりというところで、黒米を作っていることから、手前味噌ですが、どうも黒米は奄美に向いているかもしれませんよ。ということです。

一番はじめに千葉から種籾を頂いて、それを見ても細くて小さくてこれはお米とは思えないというぐらいのものだったのですが、去年辺りは大きくなっているような感じがします。勘ですから計測したのではないのですが、なんとなく古代というイメージだけじゃなくて、黒米は奄美にあっていられるかもしれない。

そして実際やってみると子供達が喜ぶんですね。年寄りも喜ぶんですね。都会の人はそうはいかないかもしれないけど、奄美には芦花部のような高齢化した小さな集落はいっぱいあるわけで、小さな集落だけでは自然を田んぼを復元することはできませんよ。そこで市街の人がどーっと出かけて行って交流して、やっていく。土地の年寄り達は自分たちがかつてやった経験がありますから、手際が良いし、教えるのがすごくうまい。それを見ると、子供達は感動して素直に習います。年寄りは子供が一時間やったら一時間分上手になるから、子供の成長を見るのがすごくうれしそうです。年寄りは年寄りの知恵を出して役割を果たし、子供は子供としての、ご婦人はご婦人の、我々のような年寄りは年寄りとして、

それぞれの年齢にふさわしい協力の仕方できていることを実感する。

【奄美で作ったものでもてなす、お米から】

これが素晴らしいので、是非そういうことの中から、先ほど中野先生がおっしゃったように、郷土にお客さんが来たときにこれは奄美で作ったものだよと自信を持って言えるように。奄美で作ったものでおもてなしができるように。まずお米から。このお米作りがアユと関係があることを初めて知りました。

田んぼが変わってくると自然が戻ってくるのが素晴らしく早いんですね。例えば、小鳥が多くなりますし、水生生物がうんと多くなり、トンボがすごく多くなりますよ。いっぱい増えて喜んでいましたら、シラサギが増えてたった2、3枚の田んぼに60羽も飛んできて辺りが真っ白になってしまいました。

うちは会報をずーっと出してきまして、5年間で25号です。これが記録だと思えますが、これをお持ち帰り頂き読んで頂きますと、俺たちもやってみようかという気が出てくるんじゃないかと期待しています。

【水田がもつ多面的機能】

島谷：水田は農水省でも多面的機能といっているんですが、畑と水田を比べると川に流れる土の量が全然違うのです。畑は一年間に1ミ³くらい削れると言われてます。水田はほとんど削れないですから、赤土対策とかにもすごく効くといわれています。水を溜めますから、気候も安定するし、川の水の量も安定するのだと思う。そういう意味でも水田は重要、リュウキュウアユともつながっていくのかなと、今日は色々な話を聞いていて思いました。

先ほど四宮先生からも自然再生のプロジェクトをやりたいというお話がかなり出て、初めて話を聞かれた方も多いと思いま

すが、いかがでしょう。かなり大規模なプロジェクトもありましたが、感想はありますか？塩崎さん、たぶん一番関係されるかもしれませんが、いかがでしょう？

【地域、専門家、行政が一体になった取り組みを】

塩崎：先ほどのご意見お話の中にもありましたように、自然再生推進法という法律も制定されて、北海道の釧路湿原の話とか、兵庫県の豊岡市のコウノトリの成功例とかも色々ありましたが、そういう事業も取り組みをしていくことが必要だと思います。これについてはどうしても地域、専門家、行政が一体になった形での再生の取り組みが必要であると思います。今後どういう形での方向性が見いだせるかこれから研究していく必要があると思っています。

島谷：和田さん、鍵和田さんには食の話がありましたが、四宮先生の大きい話はどうのように写るかなと思ったのですが。

【昼間は川遊び—住用の夏の過ごし方】

和田：私たち住用の人たちの夏の過ごし方は、暑い昼間の時期は農作業ができませんので、朝早くと夕方に畑に行きます。昼間の時間はどこに行くかといいますと、より涼しく過ごせるように川に行ってエビを捕ったりして、涼みながら暑さをしのいでいる。子供達も連れて、鍋と野菜だけを持って行くと、そこで捕れたアユとかテナガエビをだしにおつゆを作って、持って行ったおにぎりとか夕方まで川で遊んで過ごすという生活をしていました。

最近川と人との関わりが遠くなってきたように感じます。以前は、どこからでも川に降りていけた。けれども最近は限られたところまで行かないと川に上り降りできない。人がしょっちゅう川に行かないから、

川が荒れてきて雑草が生い茂ったり、川に遊びに行ける環境が遠ざかってきたんじゃないかなと思います。

そういう面からも四宮先生方が取り組んでいる再生事業ができますと、以前のように家族連れや友達連れで川と日常生活が密着したそういう暮らしができてくるのじゃないかなと期待しています。

【人が川に近づける川づくりを】

四宮：昨日、大島支庁の土木課の皆さんと川を見てきたのですが、特に役勝川は改修がどんどん進んでかなり高い堤防があって降りられる場所が限られている。あれをもう少し数を増やして頂くというようなことは大事で、川再生では人が川に近づけるということが大事なポイントです。

もう一つは、川がだんだん浅くなってきたという話がありましたよね。昔は胸まで浸かってエビ捕りをしたのに、今はそんな所はない。生き物がいたのに、そういう所が減ってきた。私も15年くらい見ていてそう思います。ポイントポイントで深い淵を作り直すということは、そんなにお金もかからないのできるそうなので、是非島谷先生のアドバイスでやりたいですね。今日も河川課の方が来ておられます。是非部長さん、実現したいですね。

川の生きものを探す子供たち



和田：深い所を住用ではコモリと言いまして、〇〇ゴモリと名前が付いているんです。コモリの名前が付いている所は淵で、そこで島の人たちが川と関わりを持っていた所です。

島谷：お籠もりのような宗教的なことをやっていた？

和田：いいえ、深い所をコモリというのです。コモリにはアユもエビもいるし、昔カニのイザリなどをするとカニがいたり、生き物がそこで多く生きている。最近では平坦に真っ直ぐに川の形が変わってきたということです。

【川への関心が遠のくと一】

鍵和田：川の再生ということでは、3年くらい前に、名瀬市の中心を流れる新川のことを半田さん達とチームを組んで調べたり意識調査をしたことがあったんです。

あそこは当然アユもないし、私たちが懐かしむような生き物はほとんどいなくて、その原因はコイが放流されたこともあるし、上流では夏水が枯れることがあると思います。他にも川に降りにくいとか、ゴミステーションが橋の上であって、風で飛ばされてゴミが川の中に落ちてしまうというようなちょっとかわいそうな新川でした。

それで、住民の関心がなぜ遠ざかったのかなと考えると、昔のように遊んで慣れ親しんだ川だったら、もっと注目しただろうし、コイ以外の魚がいて遊んで取ったりしたら人々ももっと関心を持って川岸を散策するとき、ゴミを拾ったりしたと思うんですね。

半田さんが中心になって特にやったのは河川改修工事をしている最中だったので、川岸のコンクリート護岸を改善して、空洞のあるものに変えてもらったり、脇に植え

込みの余地を作ってもらったり、上り下りの階段を幅広くしたり改善の要求を大島支庁に出しました。でも、一部の市民団体の動きにしかなく、本当に地元に住んでる人たちが話し合っ、大島支庁の担当者と一緒にできるという形ではなかったということではあります。

【コモリ（淵）の名前がわかる地図を作ろう】

島谷：例えば、川の淵の名前をよみがえらせることはできますか？今そういう地図を作ろうと思ったらそういうことを調べられるような人はまだ生きているのですか？それ、大切ですよ。もう分からなくなっちゃうじゃないですか。

パネル討論



和田：まだ40代以上の人たちは淵の名前を知っています。そういう方々が集まって川がどういう風に蛇行していたかも全部記憶として残っていますので、大丈夫だと思います。西仲間の住用川の方は何名かが集まって川の淵の名前を書いた図面があります。まだ完成まではいってませんが。

島谷：そういうことをされているのですか。おもしろいですね。

四宮：鹿児島でも大隅の一級河川の肝属川でそういう調査をやりました。6、7年前コンサルタントに依頼して、上から下まで主要な淵と瀬の名前を調べていました。

瀬より淵の方が名前が付いていますね。あれをその後どう生かしたかは聞いていないのですが、ぜひそういうこともやって、今後川の再生の時には生かしたいですね。

島谷：今日聞いていて思うのは、言葉がいいですよ。それを大切にしたら、地域おこしの時には生きる。コモリとショボリ、それから漁のことをイザリとっておられた。きれいなことばですね。大事にしなければと思いました。

会場に沖縄のリユウキュウアユに関わっている方が来ておりますので、自己紹介も含めて沖縄のリユウキュウアユについて簡単に紹介して頂ければと思います。

【ヤジをめぐる奄美と沖縄の交流を再び】

山田：皆さんこんにちは。沖縄の「リユウキュウアユを蘇生させる会」という会があります。私は今東京に住んでいますが、沖縄にいる頃から関わってきました。

沖縄では1978年、今から30年ほど前にアユが絶滅しましたが、その10年後くらいから復活させようと、琉球大学の池原先生を中心に、国と県と自治体と学者、それから民間の方々みんなで力を合わせて、「リユウキュウアユを蘇生させる会」を作りました。

17年活動して来ましたが、沖縄では養殖をしよう、種苗を生産しようとその種苗は奄美から取り寄せたのですが、色々努力をし工夫もして、毎年放流していますが、まだ河川には戻ってきません。ダム湖にアユを陸封化することは10年でできました。しかし一度いなくなってから、河川にアユを戻すというのは、大変難しいというのを実感しています。

【沖縄で始まった自然再生】

毎年毎年放流を繰り返し、先生方にお知恵をお借りしながら、やっと自然再生推進法に則ってやんばるの河川海岸自然再生協

議会が立ち上がりました。残念ながらこの春一回流れてしまいましたが、再度立ち上げて一河川ずつ、アユが棲める川づくりをしようと一所懸命活動しています。

本年度の活動の中に奄美との交流を積極的に推進しようというお話をしております。蘇生させる会は沖縄を中心に約200人、東京を中心に全国に80人、計約300人くらいで活動をしていて、実は今奄美にスパイを送り込んでおまして、迫田君という環境省のレンジャーが入っております。できるなら、以前行ったような奄美とのフォーラムなど力を合わせて琉球列島全体でリュウキュウアユを世界ブランドにしていければと思っています。

島谷：どうもありがとうございます。沖縄ではいよいよ自然再生協議会に則って始まるようですが、沖縄ではダム湖に1万尾くらいいる。陸封化というのは、海に行かないでダム湖自体を海だと思って成長するアユのことを、陸の中に封じ込められたということで陸封といいます。それが成功しているダムが5ダムあります。その代わり、川には棲めない。

奄美は川にはいるけど、ダム湖にはいませんのでそういうところも交流できるポイントかなと思います。非常に刺激的なお話を頂きましたが、会場からもどなたでもこういう風にしたらどうかとか、今まで聞いてこうだったよとかあればどなたでもどうぞ。

井上：コモリについてですが、我々が若い頃は飛び込み場所になっていました。そしてそこは生息地であり産卵地でもありました。その場所は大切にされる場所でもあります。そういうところでは決しておしっこをしてはいけない、するとケンムンが悪さをするとか、おちんちんが大きくなるとか言われて、そこを大切にするのは子供の頃

から言い聞かせられていた場所です。

ケンムンは小妖怪のことですが、カッパに似ています。そういう場所は聖地でもあるということです。繁殖地、棲息地でもあるわけです。今の河川はコモリがなくなっているというのは先ほどのご指摘の通りです。コモリを大切にすれば、ケンムンが再生されて、ケンムンに付いた奄美の文化も生まれてくるのではないかと思います。

島谷：ありがとうございました。ケンムンとコモリの関係。奥が深いですね。他におもしろい話しはないですか？

【コモリ（淵）を再生するには】

與島：住用のヤジ友の会の與島と言います。

川内集落で育成会をしているときに、子供達が川遊びをしない、川が干上がってしまうと川が死んでしまうということで、集落でミニ運動会をしまして市から寄付金を頂いて、コイを買って放流しました。その時は子供達の情操教育のために入れたのですが、年数が経つにつれ反省をしなければならぬ状態になり、現在何とかアユを再生したいという気持ちになって頑張っているところです。

行政に携わっていますので、国の施策で休耕田対策、転作対策、その後に農地の中での農振法の整備、土地改良をやって来ました。悲しいかな、基盤整備、土地改良までして作られた畑は後継者がいなくて肉用牛の採草地として利用されております。それをもう一度水田にということになると、団塊の世代で財産と生命と経済を守るために携わってきた年数からいきますと「何で？」という気持ちが出ます。

しかし最近、洪水から財産と生命を守るために川幅を広げ、50年スパンの大きな川が生まれました。その時コモリはなくなっています。これから一番にやってもらいた

いのは広げた河道の中に普段流れている細い川、その中に小さなコモリを作っていくことです。どうするかといいますと、アユストーンという石があり、一級河川では実施されている話を聞いております。それを導入できないかと考えております。

島谷：具体的なご提案ですね。コモリがキーワードになってきましたね。

沖縄のリュウキュウアユの会に入っておられる方どうぞ。

【地域づくりに向かないクロウサギ】

迫田：今は入っていません。今は環境省の野生生物保護センターで働いています。主にアマミノクロウサギの保護増殖事業にかかわってしまして、仕事上は関われないので、こういうところで勉強させて頂いています。

クロウサギも奄美と徳之島にしかいないアユと同じような世界の宝です。が、アユと違うのは食べられないということと夜行性で山奥にしかいないので子供達がちょっと行って観察会をすることもできない。

なかなか見る機会もなく、昔から食文化とかそういうものがない動物なので、地元の人と連携することで地域づくりにつなげるのが難しいジャンルなのですが、今回話されていることを参考にしたい。アユは川に関わって地元に関係が深く、ヤジと名前が付いているくらい親しみのある生き物ですのでその辺を生かしながら、育てていっていただければと思います。

島谷：貴重なご意見ですね。河口さん、ぜひ。私の研究室の助教です。北海道から奄美まで魚の調査をしている魚の研究者です。

【イトウでも同じ、減少原因は複合的】

河口：初めまして九州大学の河口です。以前北海道のイトウの研究をしていました。イトウは釣りの対象魚として人気があります。北海道の道北の猿払村では地元の方達がイトウの棲める川を守って子供達の世代に環境自体を残していくための活動を、地味に熱心にやられています。

例えば、サケが上れるような50センチくらいの落差も大きくなったイトウは上れない。その下でうろうろしていて大きくなったオスは体が真っ赤になるので、上から見て大きな魚と分かってしまう。すると密猟者が大きな網で掬って持って行ってしまいます。地域の人はそれを何とか防ぎたい。そういった構造物の改良をしてイトウが上流へ上れるようになったこともあった。

イトウを見ていたときにも、森林を伐採すると細かい土砂が出る。その土砂がイトウの産卵場の産卵床に入って、目詰まりをおこす。卵は水がどんどん流れてこないのだめなのですね。酸素をどんどん与えなくちゃいけないから。目詰まりをおこすと卵が死んでしまう。

イトウも一つの要因だけで減少しているのではなくて、色んな要因が複雑に絡み合いながら、減少している。奄美に来てシンポジウムなどでリュウキュウアユの話を聞いて山や川を見ての印象は、やっぱり似ているなあと思いました。一つのことではなくて、ここは赤土なので、一回裸地にしてみると土砂が出やすいだろうし、そういったことがさまざまな形で影響しているんだなと感じました。

島谷：今日、十分に出てこなかった話題ですが、地球温暖化とリュウキュウアユの問題とどのような関係があるか、その辺、四宮先生少し解説してもらえますか。

【暖冬には弱いリュウキュウアユ】

四宮：アユは元はと言うとサケの仲間であって北の魚、北方起源です。暖かい所は苦手な魚です。リュウキュウアユはその中で一番南で独自の場所を見つけて生活をするようになったわけですね。そういった意味では一番南のサケの仲間ということになります。どうしても出が北の魚ですから、暖かい温度に弱い。一番弱い時期は何でもそうですが子供のときです。一番弱い時期を寒い冬に合わせて産卵してきたのです。だけど地球温暖化という言葉で言われていますが、思ったより速い速度で変化は進行していて、暖かい冬が周期的にくる。そういうことには弱い。

島谷：今年の冬は暖かかったですね。そういう影響は出ていますか？

四宮：今年の冬は暖かくその前の年はかなり冷たくて、平年並みかそれより低かった。奄美で珍しく雪が降った。去年はアユの遡上が良かったですね。冷たい冬が良かったかなと思っています。それと去年は雨が降らなかったですね。成長できなくて、小型ばかり、という状況でした。

そこへ産卵期に突入したが、気温が下がらない。これまた産卵ができない、非常に厳しい状況です。一応役勝川は上がってきているようですが、宇検の河内川は非常に危ない。今年はやはり心配しています。これはだんだんこういうことが起きるわけですね。こういうときに山の上のダム湖に入れておくというのは、それで全てが解決するわけではないのですが、暖かい年の保険にはなるかなということですね。

島谷：奄美の冬の海水温のままだと稚魚が育たないんですね。マングローブで干上がって18℃以下にならないと稚魚は生きて

いけない。20℃以上になるとだめなわけだから、奄美の海水温は冬でも20℃を超えているわけですね。だからどうしても冬干満の差があって、干上がって空気に触れて少し冷たくなる環境がないといけない。冬自体が暖かくなってくると稚魚には厳しい。ということで、地球温暖化の影響を受ける可能性があると考えられなくはないと。

四宮：そうですね。沖縄の山田さんの話でダム湖はうまくいったけど、川へ放流しても帰ってこない。沖縄は難しい問題があると。その理由の一つが、沖縄の川は環境整備に頑張っているけれど、海岸の状況が良くないですね。干潟の環境がほとんどなくなってしまった。そういったことも効いているような気がします。

【どうやって守る、地球温暖化の最前線】

島谷：今の環境変化の中で貴重な生物がそういう気候に耐えられなくて絶滅するということなことが考えられる。その最前線に当たる、我々の世代が試されていると思うんですね。地球温暖化だって、人間がもたらしたものだから乗り越えるまでの間に、その生き物をノアの箱船じゃないが、どうやって守るのか迫られていると思うんですが、日本の最前線にいるのがこの地域だと私は全国的に見ていて思います。

最後に一言ずつ皆さんに「ヤジの再生と地域づくり」ということで提言をお願いします。

【遺産登録を目指す中でアユも生かしたい】

中野：今日はアユということで皆さん関心が高まったと思います。奄美にはリュウキュウアユとか海ではシラヒゲウニとかヤコウガイ、山に行けばクロウサギとかルリカケスという色んな自然が残っています。昔からある自然の恵みを生かして地域づくりができないかということです。そのため

にはこういう素晴らしい自然があるのだと日本国内に発信する有力な手段として世界自然遺産登録が有効な手段だと思います。

世界自然遺産登録されることによって意識が高まることによって、地域に住む人たちがあらためてここは素晴らしい所だと皆さんも子供達も理解でき、それならここに住んでみようとか、IターンとかUターンとか、お墨付きをもらうことが大事じゃないかと思う。

日本人はそういう権威のお墨付きを頂くとあらためてその素晴らしさが分かるという。ここに住んでいるとその素晴らしさが分からない。どのくらい素晴らしいかということが登録されることで証明されるのだと思います。生半可なことでは登録されません。非常に審査が厳しいです。ぜひ世界自然遺産登録を目指す。その中でアユもまた生かしていきたいということでございます。

島谷：ありがとうございます。

塩崎：先ほど沖縄の山田さんから奄美と沖縄の交流ができないかというお話がありましたが、現在でも沖縄と奄美のつながりは深いものがありまして、沖縄の北部地域との交流の一環として、「奄美やんばる交流」というのが毎年持ち回りで開かれています。そういうつながり、また沖縄の大学との活動連携も必要になってくるのではないかと思います。

リュウキュウアユに対する認識の高まり、さらに観光産業界との連携、あるいは地元へ自然への構築を高じていくことで広域的な連携の輪が広まり、アユの再生にもつながっていくのではないかと考えています。

島谷：ありがとうございます。

【川の生き物を利用した食文化を伝えたい】

和田：私たちのグループは小さな集団ではありますが、特にリュウキュウアユの棲んでいる住用に住んでいるので、みんなが認識をして私たちの活動の中で地元でできる活動が中野さんがおっしゃった舌で味わう、私たちがヤジとかかかわっているのも、私たちが知っているあの味をもう一度という思いがあって今活動しています。子供達に川の生き物を利用した奄美の地域の豊かな食文化を伝えながら、地域づくり、地域の活性化に努めていきたいと考えております。

【島でとれる野菜や魚を使う、食卓の見直し】

鍵和田：食の話が出ましたが、ヤジに限らず若い世代の子供達の食文化が危機的状況にあると思います。島で取れる野菜とか魚はわざわざ使わなくても、本土から来るものでもおいしい料理は作れるんですよね。その方が簡単だったりする。食卓の見直しは温暖化防止の暮らしの見直しにもつながることになると思います。

もう一つは川への関心を持って自分の身近なところで川の改修工事があるとかそういうときに、青写真の段階から行政にものを言ったり、行政と共同していく市民運動も怠けてはいけないかなと思いました。

【アユを守る運動の一つとして田んぼ作りを】

四本：ここに僕が座っているのは田んぼを作ることを進めるといふしかないだろうと。宇検村と住用村で川を守るといふときに、先ほどお話にありましたように、水田が非常にアユを大きくする上で大事だと。山と畑、田んぼ、川、海とつながっているわけで、まず休耕田を復元して頂きたい。

そのときに小さな集落だけではもう無理です。できるだけ市街地で例えば宇検村だったら古仁屋に住んでる人を引っ張り出すとか、都市部の人の力をお借りする。先

生方が一番良いと思います。先生方の力が非常に大きいかと思えます。

家族で田植え、稲刈りを体験することが誠に効果的です。島の人々が作っているマドロン、うどんなど労働の後食べるとおいしい。また来る。始めてきた人はずっと来るというような状況ができます。それは芦花部が実際にできたのでどこでもできると思えます。

田んぼ作りをアユを守る運動の一つとしてなさったらどうかと思えます。田んぼを作っている中でアユにも関心が出てくるようにして一挙両得のような取り組み方をぜひお願いしたいと。私たちもこれから田んぼを増やそうとすると課題が多いのですが、何とか続けていきたいと思っています。

【やることで元気がでる、賑やかになる、次の力になる、この循環を続ける】

四宮：企画者の一人でもあるのですが、今日は色々な方に来て頂いて、みんなそれぞれ色んなところで頑張っておられる。そういう話ができ良かったなあと思っています。

今の四本さんの話のように、やっている元気が出ますよね。そうすると人が集まってにぎやかになる。ますます次の力が出る。この循環を続けていきたいとおもいます。まだ私たちの調査も続けながら、こんなシンポジウムもやりたいと思っています。ぜひまたお出かけ下さい。

【地道に回復していく、最終的には食べることまで】

島谷：今日はパネラーの方、会場の方に多面的に色々な角度からリュウキュウアユについて語って頂きました。世界自然遺産をにらみながらリュウキュウアユというものを地道に回復していく、最終的に食べることまでいこうというその方向性について

は、皆様と共有できたのではないかなと思います。

私自身はコモリがとってもおもしろくてコモリマップができたら、ぜひ住民の方と一緒に一つや二つコモリを作るのはお金もかかりませんので、今年一個くらい作ってみたいなと思いました。筑後川を見ていると、住民参加で住民自らが公共事業をやるというような試みももう始まっています。それはお金がかからないで、建設業者も住民の一人として、重機一台貸して頂いて、というようなことでコモリは復元できますので、コモリマップみたいなのを作って何かやりたいなという夢を持ちました。

リュウキュウアユを食べるのを最終目標にして地域の皆さんと力を合わせてやっていきましょうというのを私の最後の言葉にして、パネルディスカッションを終わらせて頂きます。ご協力ありがとうございました。